

たった一つの、私のものではない「日本語」

——ジャック・デリダ、中上健次、『批評空間』——

松田樹

一、一九八六年のシンポジウム——ジャック・デリダと中上健次

一九八六年、パリのポンピドゥー・センターにて「前衛芸術の日本」展(86・12・9～87・3・2)が開催され、それを祝して中上健次とジャック・デリダによる公開対談が行われた。先立つシンポジウムには柄谷行人、浅田彰、蓮實重彦、フェニックス・ガタリらが登壇し、彼らに見守られる形で対談は進められた。対談は翌年に「穢れということ」(『文学界』87・5、訳・宮林寛)と題して日本の文芸誌に掲載され、中上の国際的な活動の広がりや西欧を代表する知識人として振る舞うデリダの姿が一般読者に伝えられることとなった¹。後年、浅田はデリダの追悼文でも八六年のシンポについて回想し、「異国の作家とも腹蔵なく話してくれるような人になっていた」「ある種の社会的責任」を引き受け始めた八〇年代のデリダの方針転換を同時代人として感慨深げに振り返っている²。

だが、その場に居合わせた批評家を除けば、中上とデリダとの奇妙な取り合わせは、八〇年代日本の現代思想の興隆——いわゆる「ニュー・アカデミズム」——に連なる一現象としてのみ消費され、両者の発言の内容や活動の対応についてはこれまで検討が加えられてこなかった。中上とデリダを同じ議論の俎上に載せた唯一のものである守中高明の論考でも、そもそも対談の存在には触れられていないばかりか、中上の活動の分析は主に七〇年代までに限定されている³。中上はデリダとの対談に先立ち、八五年には「三島由紀夫をめぐって」と題して「二つの種類のアウトカースト」である「天皇」と「部落」についてパリ高等師範学校にて講演を行っていた⁴。八〇年代以降、中上は被差別部落の出自とそれが日本文化の下で持つ意味を異国の聴衆を前に問い直してゆく。デリダとの対談もまた、八〇年代日本の論壇を彩る一出来事として理解するのではなく、同時期中上の活動の延長線上に位置付けられねばならない。

さらに言えば、両者の対談はそれを取り囲んだ批評家たちの問題意識を明かすものとしても読解することができる。例えば、司会を務めた浅田は討議の場で「正の天皇主義者である三島に対して、負の天皇主義者として自己規定された」と中上の関心をパラフレーズした上で、「そういうナルシスティックな閉域から逃れて、一種の遊牧のほうへ向かっていった」ジャン・ジュネの存在を示唆している。それはジュネ論『吊鐘』(原著 74)を上梓したデリダと青年時代ジュネに傾倒していた中上との間に議論の回路を作り出そうとする配慮であるとともに、同年四月に亡くなったジュネの活動を精力的に日本で紹介していた浅田自身の批評的実践に連なる発言であった。後に浅田と柄谷が立ち上げた雑誌『批評空間』(第一期 91・4～94・1、第二期 94・4～00・4、第

三期 01・10～02・7) では、まさにその『弔鐘』の翻訳(訳・鶴飼哲)を始めとしてフランス現代思想の日本の論壇への本格的な移植が試みられてゆく。同誌の第一期終刊号に当てられた特集「中上健次をめぐる」(柄谷行人、浅田彰、蓮實重彦、渡部直己)にてシンポを囲んだ批評家らが「中上健次は『批評空間』の準備段階で深く関係していました」と明かしている通り、デリダと中上を対峙させる試みは後に『批評空間』へと結実するある時期の日本の論壇の雰囲気証言しているのである。

本稿は、一九八六年のジャック・デリダと中上健次との奇妙な邂逅を、当時の作家を取り囲む文学史的・批評史的なコンテクストから改めて捉え直すことで、その場で交わされた議論や両者の間で展開され得たかもしれない論点を再考するものである。先に挙げた守中高明は、被差別部落民である中上とフランス系ユダヤ人であるデリダの出自を重ね合わせ、「いかなる空虚な中心にも回収されることのない、散種としての市民たちの終わりなく脱中心的で不連続な結び合い」(傍点原文)を「デリダ＝中上の思考」と呼ぶ。だが本稿では、むしろそうした政治的な態度決定から敢えて撤退をしながらも、文学という営為自体に政治性を看取しようとしたところに中上とデリダに、そして両者を取り囲んだ批評家たちに共通する問題意識を見出したい。例えば、当時の浅田が劇作やパレスチナ運動との関連を含めてジュネの活動を盛んに紹介していたのも、汚辱に塗れた生を言葉の美学によって反転させるという戦後文学的な^{アンガジュマン}参加の論理に鑄造されたジュネ像を批判し——そうした姿を日本に定着させた立役者は三島由紀夫である——⁵、「運動との不思議な連帯、熱い連帯であると同時に、ある意味では微妙な距離を残した傍観者としての立場でもある」と政治状況からの遠さの自覚にこそジュネの倫理を見出していたからに他ならなかった⁶。まず次節では、中上・デリダ対談を検討する前に、その下準備として当時の作家を取り巻いていた論壇の状況を概観しておこう。

二、「政治と文学」から文学の政治へ——柄谷行人における中上健次

「私は、中上がいるから「文学」とつながっていた」⁷。九二年に中上健次が没した際、批評家の柄谷行人はこう述べた。柄谷と中上は六七年に群像新人賞の落選組として『三田文学』の編集室で出会い、その後は折に触れて影響を与え合いながら活動を展開してきたことが知られている。『中上健次全集』(全15巻、集英社、95・5～96・8、柄谷行人、浅田彰、四方田犬彦、渡部直己編)や『中上健次発言集成』(全6巻、第三文明社、95・10～99・9、柄谷行人、桂秀実編)など、中上が没した後に残された資料のアーカイブ化を積極的に押し進めたのも柄谷であった。柄谷は中上の死後、「中上健次の死は総体としての近代文学の死を象徴する」⁸と彼の活動に文学史的な意味付けを与えてゆくことになるが、ここでは主に七〇年代に限定して両者の活動の並行性を確認しておきたい。

すでに別稿で明らかにした通り⁹、柄谷行人の批評家としての出発は、戦後文学者には自明視されていた「政治と文学」という命題、つまりは文学者における政治参加の問いを宙吊りにしたところに始まる。東浩紀が戦後批評の文脈で整理しているように、六八年に群像賞を受けた柄谷の

デビュー作「意識と自然」は、吉本隆明や江藤淳といった戦後文学者には連続性が自明視されていた「倫理的問題（政治）」と「存在論的問題（文学）」との「乖離」を主題としていた¹⁰。同評論を収めた『畏怖する人間』（冬樹社、72・2）や『意味という病』（河出書房新社、75・2）は、戦後派からは非政治的と退けられていた一群の新人作家——古井由吉・後藤明生・黒井千次ら「内向の世代」——を擁護し、彼らの作品に見られる「内向性」をむしろ「現実を回復する道を自らの「方法的懐疑」によって切りひら」いていると評価する¹¹。「政治と文学」というような問題も、またそれに似ている。[...] それらをおおっていた観念的な外被が消えてしまったとき「政治」という奇妙なもの、参加するとか逃避するとかいった言葉が通用しないような「政治」というものの本質があらわにみえるようになった¹²。このように柄谷は学生運動の高揚が日常的な停滞に取って変わろうとしていた七〇年代初頭、作家たちは政治的な主題から敢えて撤退し、文学の領域において日常そのものの自明性を問い直すことからのみ政治への道を回復し得ると説いていたのである。

七七年三月から翌年一月にかけて柄谷が連載した文芸時評『反文学論』（冬樹社、79・4）は、巻頭に連載中であった中上健次『枯木灘』（河出書房新社、77・5）を取り上げている。柄谷によれば、作家自身の血縁と故郷の風土を基盤に据えた本作は、しかし「自伝」¹³（吉本隆明）や「自然主義文学」¹⁴（江藤淳）として捉えるべきではない。ここに見られるのは「内向の世代」にも共通した「方法的」な懐疑に他ならず、「中上氏はおそらくより内向的な作家として徹底し、あたかも「私、そのものが破壊されたかのような逆説的相貌をもってあらわれた」からである。日常性への問いから出発した「内向の世代」が自然主義文学の伝統へと回帰していったのとは対照的に¹⁵、彼らの後に登場した中上はそうした近代文学の伝統に否定を突きつけていると柄谷は言う。これは柄谷自身の問題意識の変遷を裏書きしている。『意味という病』を刊行した後、柄谷は七五年九月にイェール大学に研究員として赴任し——そこでポール・ド・マンと出会い、のちにド・マンからデリダを紹介されることになる¹⁶——、八〇年九月からは約半年に渡ってアメリカに滞在する。日米を往復しながら執筆されたのが、同時代の文芸評論『反文学論』と明治二〇年代における近代文学の成立を問うた『日本近代文学の起源』（『季刊芸術』78・夏～79・夏、『群像』80・1～80・6→講談社、80・8）である。「現実があり、風景があり、内面があり、私がある、と彼らはいうだろうが、それらは、近年に作りだされた、そしてそのことが忘れられた一つの制度にほかならない。[...]「文学」の外に政治があるのではなく、「文学」が政治なのだ。「政治と文学」という考えはすでに「文学」である」。『反文学論』の末尾にこう書き付けられている通り、七〇年代末の柄谷は日本とアメリカ、同時代と明治期を往還しながら、政治に対置される文学という発想こそ近代文学の成立時点から続く制度的思考に他ならないことを問うていた。

「柄谷氏の批評をみていると、小説とはなにかと思う」¹⁷。一方、中上健次もまたこう柄谷からの問いかけに応答しつつ、近代文学の伝統に対する懐疑を深めてゆく。「柄谷行人大兄、十五年前に出会った時の新宿、紀伊國屋書店三階の喫茶店で何を話したか覚えているだろうか？ [...] 二人に共通してあったのは、政治的な文学などあってたまるか、文学的な政治などあってたまるかという認識だった」¹⁸。柄谷と同時期にデビューした中上も戦後派からの切断を出発点として共

有しながら、他方で「内向の世代」と蔑称される作家たちの何人が、内向する内部とは、近代の病気の産物だ、と自覚しているだろうか¹⁹と「心理や意識」といった近代的な制度に無自覚な先行世代に批判を向けてゆく。七〇年代末に刊行された柄谷との対談集『小林秀雄をこえて』（河出書房新社、79・9）は、両者の間で一連の問題意識が分け持たれていたことを窺わせる。

柄谷 日本の批評が小林秀雄という一つのパラダイムの上にあるということがみえてきた。

たしかに、吉本隆明も江藤淳もそれぞれ小林秀雄に対立するだろうが、それらもふくめて結局一つのパラダイムがあって、そのパラダイム自体に違和を感じはじめた。[...]

現在では、小林秀雄がどうの、白樺派がどうのということではなくて、むしろ小林秀雄というプロブレマティック、あるいは近代の「文学」とか、「人間」とかいうものの制度性を根こそぎ問題にしようということになってきている。

中上 [...] つまりもともと日本には物語しかなかった。文明開化といわれる明治期にキリスト教と結びついた西欧種の近代がやって来て、キリスト教と重なるような形で入って来、その翻訳語としての文学、異物としての文学がはじまったんですよ。

柄谷行人も転倒がおこった明治期を「告白という制度」（『日本近代文学の起源』所収）で論じていることだし、物語を考えつづけている僕も、あなたの仕事から啓発されながら、考えている事なんです、小林秀雄は錯覚しているわけです。

（中上健次・柄谷行人『小林秀雄をこえて』）

明治二〇年代に形成された書記制度が「文学」や「人間」といった概念を作り出したとすれば、それをあたかも自明のように捉える我々は未だ近代文学の伝統の下に閉ざされてしまっている。江藤や吉本といった戦後文学者さえも、「小林秀雄という一つのパラダイム」に幽閉されたままなのである。批評家が近代文学の成立時点へと遡ることでその自明性を掘り崩そうとするならば、小説家に可能なことは近代以前の書記制度を自身のエクリチュールへと積極的に取り込んでゆくことである。『化粧』（講談社、78・3）という短篇集中中上は、私小説を思わせる身辺雑記的な内容を採用しながらも、そこにいささか強引にも古典の翻案を接合することで近代文学の枠組みを乗り越えることを試みている²⁰。さらに、『日本近代文学の起源』を後追いつけるかのように中上は、「物語の系譜」（『国文学解釈と教材の研究』79・2～85・6、渡米のために一時中断を挟みながら断続的に連載）と題した評論を執筆し——上記の対談集にもその一部が収められていた——、「告白、真理、人間」といったものから自由な「物語作家」（佐藤春夫、谷崎潤一郎、上田秋成、折口信夫、円地文子）に焦点を当てている。同時期中上の仕事について柄谷は、「僕は、昨夏、『日本近代文学の起源』を出版する前にアメリカへ発った。[...]それが漢字や律令制が導入された奈良時代における「転倒」の上に累積されたものである以上、僕は次の仕事としてそれをやるべきはずだった。そうすれば、君がやっていることと重なり合うことになっただろう」と記している²¹。七〇年代末に柄谷と中上が共有していたのは、「政治と文学」を対置する前世代の発想を歴史的に問い直し、その相補関係を乗り越えたところから新たな言説空間を立ち上げねばならないと

いう認識であった。

蓮實重彦との対談「文学と思想」(『群像』95・1)にて柄谷は、「一九六八年」あるいはそれに象徴されるものは、きわめて両義的でした。[...] 美学的なものの氾濫です。と同時に、それに対する決定的な批判もその時点からはじまっている」と文学の自明性を問う自らの批評を六八年という歴史的な符号の下に位置付ける。のみならず、同時期にデビューを果たした蓮實に「われわれの批評の開始をそこにおくことができる」と呼びかける。柄谷から同志的な連帯を求められた蓮實もまた「戦後派が持っていた政治と文学という図式は全くなかった」と六八年にやはりある種の切断を見出すばかりか、「全共闘運動がなおとどめていた文学主義に対する批判」と「政治と文学」の相補関係への批判にこそ自身の批評家としての出発を求めている。次節では、柄谷とともに中上の強力な擁護者であった蓮實重彦が八〇年代をどう準備していたのかを検討し、中上・デリダ対談を取り巻く言説の状況を今少し確認しておきたい。

三、「政治と文学」から文学の政治へ——蓮實重彦における中上健次

「なぜ「表層」でなければいけないのか。[...] この三つのものが「制度」によって分断され、隔離されてしまうがはやいか、その一つ一つが自分自身ではない多くのことがらをいっせいに代弁しはじめるからだ。「人間」が精神を、「言葉」が思想を、「紙」が賛否をもっともらしい顔で代弁してしまう」(傍点省略)。蓮實重彦の批評家としてのマニフェスト『表層批評宣言』(筑摩書房、79・11)は、こう記号そのものへの注視を歌う。書かれた言葉の背後に書き手の「思想」を、投票用紙に政治的な「賛否」を見出すのは「代弁者的=媒介者的な思考」に我々が馴致しているためであり、言葉の表面に目を向ければその欺瞞が顕にされることになる。蓮實によれば、吉本や江藤らに見られるのも、実は勇ましい政治参加の論理ではなく、記号そのものとの出会いに戸惑う書き手の姿に他ならない。『論註と喩』の吉本隆明は、そうした記号との遭遇に誰よりも敏感な存在である²²、「みずからの失語を他者に提供する江藤淳。いったい、「文学」は、かつてこれほど美しい犠牲者を持ったことがあるだろうか²³。柄谷とは異なって明示的に批判を向けられてはいないものの、蓮實もまた戦後派には自明視されていた「政治と文学」の連続性に切れ目を入れ、我々が日常的に縛られている政治制度への懐疑を文学という営為自体に求めてゆくのである。

柄谷とは別の仕方で文学を政治化しようとする蓮實の戦略は、彼の文学史への態度にもよく表れている。蓮實初の日本文学論を収める『「私小説」を読む』(中央公論社、79・10)は、日本近代文学の伝統的なジャンルである私小説に焦点を当てつつも、「あの白樺派の中心人物としての小説家志賀ではなく、こうした「作品」や「存在」と親しく戯れうる非人称的な言葉の体験者」としての「私」に焦点が当てられる。『夏目漱石論』(青土社、78・10)でも文学史上で構築されてきた「漱石神話」を「そ知らぬ顔でやり過」ごすことが目論まれ、あくまでも漱石作品に書き付けられた言葉にのみ視線が注がれる。蓮實が中上に注目するのも、彼の作品もまた日本近代文学史を別様に読み直していると言えるからである。「中上健次は、明らかに漱石と直哉の系譜上に

自分を位置づけながらも、[...]記号の残酷な双極的磁力を、苛酷な暴力装置としての物語の磁力の双極性と重ね合わせることを選んだ結果、少くともその意識においては、二人の小説家が達した成果を遥かに越えた地点にまで踏み込んでいる²⁴。蓮實においておよそ書くという営みは、我々が日常的に縛られている言語体系を攪乱するものとして位置付けられているのである。

蓮實と中上の対談「制度としての物語」(『カイエ』79・1)によれば、中上が蓮實の批評に触れたのは「翳る鏡の背信——古井由吉の『水』を繞って」(『三田文学』73・9)からであり、蓮實もまた「補陀落」(『季刊芸術』74・4)以降中上に着目していたという²⁵。さらに、中上は蓮實の「物語としての法——セリーヌ、中上健次、後藤明生」(『現代思想』77・8)について「あの批評はつまり、ここまでいわれるとヤバイな、と思った」と述べている。同評論は「中上健次の『枯木灘』の素晴らしさは、というより説話論的空間に波及させる刺激性は、それがすんでのところで「物語」になりそびれた「小説」自身の反復譚としてあるからだ」と、江藤や吉本とは異なって『枯木灘』を自然主義文学の延長線上に捉えるのではなく、「物語」に対する「積極的な倒錯性」を身に纏うことで「不可視の「制度」」を脱臼する試みとして論じている。

「制度」や「法」といった蓮實の用語の参照源になっているのは、同時期に彼が訳書を刊行していたジル・ドゥルーズ『マゾッホとサド』(蓮實重彦訳、晶文社、73・7)である。ドゥルーズは我々を拘束する「法」や「制度」を侵犯することで「反・言語」を志向するサドと「法を観察し、法と一体化する」マゾッホを対置し、規範に拝跪しながらもそれを内在的に書き換えてしまう後者の戦略に共感を寄せる。『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』(朝日出版社、78・12)でも蓮實が「ドゥルーズ的」と名指すのは「反=冒険者のディスクール」、すなわち「法」や「制度」を辿り直すことこそを「創造的な運動」とするマゾヒストの振る舞いであった。柄谷のように、日本近代文学への批判的眼差しを獲得したとしても、小説家はその上に作品を書き継ぐことはできない。例えば、サドのエクリチュールを政治制度の永久革命として捉えた三島が、しかし最終的には言語を否定し自決という行為によって制度批判を行わざるを得なかったように²⁶。三島以後の作家に残された余地は、制度や規範を引き受けながらもそれを骨抜きにしまうマゾッホ=蓮實的な倒錯の戦略である。蓮實の批評への共感も口にされていた通り、中上もまた連作評論「物語の系譜」で谷崎潤一郎に見られる差別表象を「法・制度へのマゾキズム」として論じている。

端的に言えば、谷崎の耽美やマゾキズムが人間の持っている原基への耽溺でもマゾキズムでもなく、法・制度へのマゾキズムであったからである。花は桜、魚は鯛。その妙に味の悪いコードからも導き出せる事だが、谷崎潤一郎の差別主義というものである。

先にこの谷崎は近代文学をおおっている人間中心主義、「文学」主義の迷妄から自由であったと言ったが、人間中心主義とは顕在化の仕方として貴族も平民も賤民もつまるところ同じ人間という平等思考を持ってくる。だが果たしてそうか。日本語が日本的法や制度、物語を作っているのは自明だが、差別が日本的法や制度の一つであるなら近代文学の範囲での人間中心主義の平等思考は迷妄の最たるものである。

(中上健次「物語の系譜——谷崎潤一郎」)

中上によれば、谷崎は「人間中心主義、「文学」主義」とは無縁な書き手であるものの、彼のエクリチュールには日本の文化に連綿と継承されてきた「法・制度」に対する「マゾキズム」がある。日本近代文学の書記制度から自由な谷崎が、しかし「近代文学唯一の差別主義者」であるのは、彼の作品には古典や芸能から「賤なるもの異形なるもの」の表象が受け継がれているからである。こう論じる中上は、自身の出自を俎上に乗せるに当たって近代文学の範疇での「平等思考」を「迷妄」と斥けながらも——そこで真っ先に批判されるのは島崎藤村『破戒』である——、同時に伝統的な「賤民」表象を内在的に書き換えようとする。前節で言及した『化粧』でも、作家の身辺雑記的な内容には古典の翻案を通じて導入される死穢や不浄のイメージがない混ぜにされていた。続く短篇集『千年の愉楽』（河出書房新社、82・8）でも、「高貴で穢れた中本の血」と時代錯誤的な血縁差別があえて題材に取られつつ、その舞台である被差別部落「路地」は南米やアイヌといった地域にまで拡張されていた。「あえて物語のもっとも深い地層にまで下降し、そこで自分の生命を賭けてまで物語から自由になるために、『千年の愉楽』を書かねばならなかった」²⁷と蓮實が評している通り、中上は柄谷から近代文学批判の問題意識を継承しつつも、蓮實のいわゆる「積極的な倒錯性」を身に纏い、古典や芸能に関わる差別表象をむしろ進んで引き受けることで自身のエクリチュールを立ち上げてゆくのである。

以上の通り、中上の活動には同時代の文学を政治化しようとしていた批評家たちの問題意識が張り付いている。七一年に行われたある講演で吉本隆明は「もう、政治と文学の関係とか、政治と文学の関わり方はどうあるべきかという問題については、卒業したつもりできました」と述べ、「三島由紀夫さんが、政治と文学について、非常にショッキングな在り方を提供してくれました」²⁸と前年に生じた三島の自決を戦後文学者に課せられてきた政治参加の問いに対する最終回答として位置付けていた。江藤淳と蓮實重彦との対談でも「三島由紀夫が死んでからものを書きはじめたんです」と三島前後の断絶が繰り返言及されているばかりか、あくまでも「記号」の手触りのみに固執する蓮實に「蓮實さんはその、文学は好きなんですか」と江藤は素朴にも問いかける²⁹。三島以後に登場した書き手は、吉本や江藤のように「政治と文学」の領域を二者択一化し、いずれかに活動の拠点を求めることをあらかじめ放棄している。むしろ二つの領域を等号で結び、読み書く営みに政治性を看取するとともに、政治制度への抵抗の契機を自身の執筆活動のうちこそ求めてゆくのである。

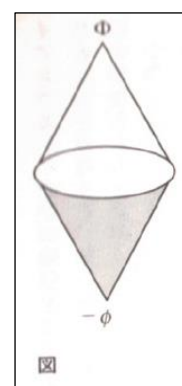
八四年に行われたある対談で柄谷行人は、文学の持つ政治を攪乱する力を「言葉の自己免疫疾患」と病——とりわけ当時社会問題化していた「エイズ」——の隠喩で説明し、それを端的に「ディコンストラクション」と呼ぶ³⁰。柄谷がこの用語を獲得する契機となったデリダやド・マンとの出会いは、後年、「同じようなことを考えていて、しかもそれを別の角度から精密にやっている人間がいたのか、という驚き」と述懐されることになる³¹。ここに戦後文学の決算として七〇年代に提出されていた論点が、八〇年代へと至って現代思想的なタームへと上書きされてゆく様子が垣間見えよう。実際、先の対談で柄谷は「全共闘のころはそれに近い状態があった。つまり大学の自己免疫状態があった」「天皇制のようなものは自己免疫的に自壊させたい」とも述べているが、六八年、天皇制、病としての文学といった話題は中上・デリダ対談へと引き継がれることになる。

次節では、中上の周囲の批評家によってデリダがどう受け止められていたのかを簡単に紹介しつつ、八六年のシンポについて検討を加えてゆこう。

四、松阪牛とフォアグラ——中上・デリダ対談について

「私をもっとも注目しているフランスの思想家ジャック・デリダは、ヨーロッパ中心主義・音声中心主義・ロゴス中心主義を解体しようとしているのだが、私の眼にはそれはフランス中心主義の解体にほかならないようにみえる」。デリダの登場が与えた衝撃について柄谷は『反文学論』にてこう記し、「日本の文学者はいま自分の思考の自明性を根こそぎ疑わねばならない時期にきている」とデリダを経由する形で日本近代文学の問い直しを主張する。蓮實もまた『反＝日本語論』（筑摩書房、77・5）にて「デリダのきわめて難解な言語的戦略とは、「音声言語」の圧政から「文字言語」を解放せんとする試み」とした上で、「こうした認識は、日本語を母国語として語り、話し、書き、読み、思考するわれわれにとっては、ほとんどその想像をこえたものだ」とやはりデリダの論を日本語という言語体系への問いへと送り返す。藤本一勇は蓮實や豊崎光一ら七〇年代にデリダを翻訳・紹介していた書き手を「デリダの受容史」「第一世代」と分類しているが³²、その初期受容者たちに共有されていたのはデリダの提起を同時代人として日本語の環境の下で引き受け直そうとする姿勢であった。

それはデリダに対峙した中上の態度にも通じている。対談の冒頭から中上は、部落問題と天皇制を日本文化の盾の両面として示し、その伝統を引き受けようとする自身の立場を「デリダさんなんか提唱している〈ディコンストラクション〉、そういうものがひょっとすると有効かもしれません」と述べる。例えば、被差別部落を追い出された老婆らが皇居へと姿を消す自作『日輪の翼』（新潮社、84・5）は、「天皇とアウト・カースト、要するに部落民がほとんど背中合わせにくっついている、という意図のもとに書かれた小説」であり、両者の関係性を問う際にデリダの議論は有効であると説く。守中高明によれば、七〇年代末から中上が繰り返してきた同様の日本文化論は、「差別者＝天皇が被差別者＝被差別部落民なしにはみずからをそれとして定位し得ない」——【図】³³のような形で説明される——という天皇と被差別部落の間の階層秩序の転倒の試みである。



【図】

だが、デリダは中上の主張を「疎外された人間の貴族主義」と呼ぶばかりか、そこに「一種の国粹主義」さえ看取している。デリダは中上の主張は天皇制に代表される「既存のフィールドにすんなり回収されてしまうような文学」に過ぎず、むしろ来るべきは「フィールドに回収され得ない別種の文学」、つまりは「文学としての部落民サイドのようなもの」（傍点引用者）ではないかと投げかける。デリダの批判は部落民の存在を文化的に基礎付けてしまう中上の語りとともに、日本社会を天皇制という象徴秩序の下に一元化する守中の論の危険性をも問いただしている³⁴。しかし、そのデリダに対して中上は、自身の説いている日本文化の姿は「中心と周縁という単色

に還元できない「霜降り肉」のようなものであり、デリダは「簡単な図形に還元してしまっている」と反論する。確かに守中の読解とは逆に、作家が例示している『日輪の翼』は、部落民と天皇の間の階層秩序そのものを無化してしまうような作品であった。

ワゴン車の中いっぱい響き、外にもれ出るロックの調子のよいリズムを耳にしながら、二十二歳のツヨシは、路地の中で生きた他の若衆もこんなつかみどころのない不安に時に捕えられたのだろうか、と思う。ツヨシは、その不安は、自分だけのものだと思った。何しろ自分の物ではない冷凍トレーラーを改造して、路地を後にして来た。冷凍トレーラーに乗せた七人の老婆にも、ツヨシにも、路地から遠ざかる道はあるが、路地に帰りつく道はないと覚悟している。眼を転じてみれば冷凍トレーラーで行くところ、すべて純無垢の路地になった。

(中上健次『日輪の翼』)

山口昌男のような論者の場合、故郷の被差別部落「路地」を舞台とする中上作品は「被差別の空間が、逆に制度＝物語＝文化を異化し詩的言語を発生させる」、つまりは天皇に代表される中心の政治権力を周縁的な被差別民が活性化させる物語として読み解かれる³⁵。だが、作中に描かれるのは実のところ最終目的地である皇居に行き着くまでの果てしない散文的な流浪の過程であり、「冷凍トレーラーで行くところ、すべて純無垢の路地になった」と被差別空間はむしろ階層化されることなく日本全域に入り込んでゆく。だからこそ、中上はデリダの批判が「フランスいやヨーロッパにあまた存在する」聖と賤、あるいは中心と周縁を選別する「フォアグラ」的発想に基づく誤解であり、自身が主張しているのはあくまでも両者を分け難く含み込んだ「霜降り肉」だと説くのである。ただし残念ながら、作家の比喩的説明はデリダに受け止められることはなく、対談は平行線のまま締め括られることになる。デリダが提起した「文学としての部落民サイド」という示唆的な文言も、中上によってその場で応答されることはなかった。

一方、「国粹主義的」とのデリダの指摘は、いみじくも八〇年代以降に中上が抱え込む困難を言い当てていた。作家が主張する通り、部落問題が天皇制との相補関係の下にあるならば、「路地」とは日本という閉ざされた空間の中でしか意味を持ち得ない。「女らの一人は道の果てまで来て、冷凍トレーラーが本当に空に翔けあがるのを想像したし、或る者は四方を海に囲まれた日本だから果てまで来て海の中へ乗っている人間もろとも沈み込む姿を想い描いた」(『日輪の翼』)。『日輪の翼』の放浪も結局のところ皇居を中心に日本列島を周回し続けるだけであり、「路地」を舞台とする八〇年代の中上作品は出口のない閉塞感に付き纏われる。そこに頻出するのは、「円環」や「縄」の主題である。『千年の愉楽』の主人公は「頭から足の先まで十重にも巻きついた龍の蛇腹におおわれて」亡くなり(「六道の辻」)、別の作品でも青年らは作の終盤で「口と眼と耳をマスクンテープでおおわれ、一目でタツヤは生命を奪るも奪らないも相手の気持ち一つだという瀬戸際」(『異族』)や「目隠しされ、口を塞がれ、身動き出来ないように手足を縛られている」(『奇蹟』)状態に置かれる。七〇年代には伝統的な部落表象への倒錯の戦略を綴っていたが、それを日本文

化の問題として引き受けた後は、あたかも作品に書き込まれた「路地」の青年の姿のごとく書き手自身がそれに自縄自縛されてゆくのである³⁶。

デリダとの対談で司会を務めた浅田は「負の天皇主義者」と名指すことで中上が逢着した困難に危惧を表明するとともに、天皇を通じた自己措定というその三島も囚われた「ナルシスティックな閉域」から逃れる方途をジュネの「遊牧」によって示唆しようとしていた。実際、浅田は中上の死後に『日輪の翼』に寄せられてきた「賤と聖の反転という定型」を「表面的な見方」と退けた上で、「どこへ、何のために。目的などないし、必要もない。ただ移動することだけがある」と中上が囚われた一国主義的な限界を乗り越える読解を提供していた³⁷。だが、周囲の危惧とは裏腹に、八六年のシンポを経た直後から中上は「天皇主義者」としての振る舞いを先鋭化させてゆく。分断を象徴するのは、昭和天皇崩御の日に発売された『文学界』に、中上・岡野弘彦の対談「天皇裕仁のロゴス」と浅田・柄谷の対談「昭和の終焉に」が同時掲載されたことである。後に柄谷は「この時期の君の言動には、よくわからないものがある。特に、天皇に関してね」と昭和末期に中上が示した言動に当惑の声を漏らしている³⁸。その後、昭和の終わりや冷戦崩壊を経て周囲との関係性を修復しようとしていた矢先、九二年に中上は急逝することになる。最後の節では、九〇年代以降、中上が早逝しなければあり得たかもしれないデリダとの再交錯の可能性を示唆して本稿を締め括ろう。

五、たった一つの、私のものではない「日本語」——デリダと中上の遺産継承

私は十八歳のころから、母や兄や姉たちや近隣の人びとを、文字で、その言動を描き続けてきました。しかし、怒りはときどき噴き上がります。文字の世界、文学の世界で、私のこの怒りは時に短絡し、日本近代文学批判になります。端的に言えば、近代文学の世界、この豊かな文字の国の表記に、私たちは含まれていない、ということです。[...]

あらためて問うしかないわけです。〈日本〉と〈私〉は、どうつながるのか。重なっているのか、切れているのか。私の書くのは〈日本〉なのか。私は〈日本〉人なのか。そう問うわけです。

(中上健次「私は〈日本〉人なのか」³⁹)

一九九〇年、ベルリンの壁崩壊直後のドイツに招かれた中上は「私は〈日本〉人なのか」(於・フランクフルト市議会ホール、90・9・30)と題した講演を行い、異国の聴衆を前にして被差別部落の生まれを日本語からの疎外体験として位置付け直す。批判的に参照されているのは、六八年にノーベル文学賞を受けた川端康成による講演「美しい日本の私」である。川端の講演が西欧の聴衆に向かって古典から戦後へと連なる日本の伝統的な美意識を寿ぐものであったとすれば、中上は「豊かな文字の国の表記に、私たちは含まれていない」とそこから疎外されてきた部落民の側こそを代弁しようとする。「〈日本〉と〈私〉の間に越えられない距離がある」と繰り返す中上は、もはや八〇年代のように天皇と被差別部落を戴く日本文化の特殊性を引き受けようとはして

いない。逆に、「私の書くのは〈日本〉なのか。私は〈日本〉人なのか」と部落民の出自を日本という共同体への絶えざる距離感として措定し、母語から疎外された異邦人としてむしろ外との連帯可能性を求めていくのである。

「私は一つしか言語を持っておらず、しかもそれは私のものではない。私の「固有の」言語は、私にとって同化不可能な言語である」。こう述べるのは、デリダの著作『たった一つの、私のものではない言葉——他者の単一言語使用』（原著 96、訳・守中高明、岩波書店、01・5）である。デリダはここでフランス系アルジェリア生まれのユダヤ人という自身の出自を、フランス語という母語への距離感として語っている。のみならず、冷戦崩壊後の言語ナショナリズムの勃興に抗して、その疎外感を言語の条件そのものとして差し出すことで固有の言語という神話の脱構築を試みる。一度きりの対談は不首尾に終わってしまったものの、九〇年代に彼らが示した振る舞いは両者が相見える可能性があったことを思わせる。デリダの講演はクレオール作家エドゥアール・グリッサンらのコロックで発表されたものであったが、大江健三郎が晩年の中上をクレオール文学者に擬えていたこともその傍証となろう⁴⁰。あるいは、亡くなる直前の中上が部落民を亡命者と読み替え、「路地」をベンヤミンの「パサージュ」に重ねようとしていたことも想起させる⁴¹。

ただし、九〇年代にはすでに中上を取り囲む言説空間もまた変質を遂げていた。文学を政治化する試みとしてデリダを頭揚していた柄谷も、冷戦崩壊後は「ディコンストラクションは、米ソの二項対立、冷戦構造という歴史性の中で見るべき」と脱構築という実践を冷戦時代の遺物として語り始める⁴²。同時期に柄谷が率いた「湾岸戦争に反対する文学者声明」（91・1）でも、仮想敵とされていたのは「大学で主流であるディコンストラクショニスト」、すなわち「何もしないにもかかわらず、そのことがあたかも最も革命的で過激であるように思い、かつ思いこませる」と非政治主義的なラベリングが貼られたデリダ派であった⁴³。蓮實もまた九〇年代以降は自身がアカデミズムの内部で権威化してゆくことに相即するかのようになり、脱構築批評が一種の理論的な枠組みへと鑄造される過程で葬り去られたテマティズム批評の豊かさにこそ言を費やすようになってゆく⁴⁴。

むしろ言語ナショナリズムへの批判意識は、九〇年代以降に活躍する小説家たちによって引き受けられていくことになる。例えば、『千年の愉楽』の英訳者から作家に転身したリービ英雄は「在日」という用語を積極的に用い、日本語を母語としない立場から言語と国民意識の結び付きを問うてゆく。多和田葉子は、しばしばツェランなど亡命作家に示唆を受けつつ、日本語の言語体系に揺さぶりをかけ続けている。近年では、台湾生まれの温又柔がデリダの『たった一つの、私のものではない言葉』を参照し、やはり日本語との距離を計り直そうとしている⁴⁵。こうした傾向は、中上が没した直後にもすでにその萌芽が現れていた。九二年十月号の『批評空間』編集後記には、「八月十二日、中上健次が世を去り、日本近代文学は事実上終わった。[...] その彼がパリでデリダとやった公開討論は今も忘れられない」と浅田によって回顧的な文章が書き付けられている反面、柄谷の欄では「実は、中上健次が創刊号から小説を連載したいと申し出ていた。[...] いよいよ、今号から、水村美苗の小説が開始される」とバイリンガルの立場から日本近代文学の歴史を捉え直す水村美苗「日本近代文学 私小説 from left to right」（『批評空間』92・10～94・10）

の連載が予告されている。中上とデリダが再交錯し得たかもしれない論点は、彼以後の作家によって継承・展開されてゆくのである。

ところで、中上が初めて部落問題を取り上げたルポルタージュ『紀州 木の国・根の国物語』（朝日新聞社、78・7）には、被差別部落の出自ゆえに言葉の規範につまずく青年の様子が素描されていた。フーコーによる『ピエール・リヴィエールの犯罪——狂気と理性』（岸田秀、久米博訳、河出書房新社、75・9）を参照しながら、書き手の「私」は「たとえばミシェル・フーコーの「ピエール・リヴィエール」やカミュの「ムルソー」を見るからである。彼がつまずいているのは言葉であり、これからつまずくだろうと予測するのも言葉である」と、ある部落青年の境遇に日本語という規範への不適合を見る。

青年を、ここで紹介してよいか、どうか分からぬ。[...] 年齢二十五歳。新宮の篇で紹介した少女の兄である。彼は、今、運転免許証を取得のため、勉強している。同世代の二人の青年が、ほとんど、毎日、二時間ばかりつききりで勉強をみている。「速やかに」「妨げる」という言葉の意味が分からなかった青年は、学習の成果により次第に成績が上がり、仮免許をパスする。しかし、つまずいたのは本検である。合計七回落ちた。いや、つまずいたのは言葉である。 [...]

私は、その何度も運転免許の試験に落ち、学習しているにもかかわらず、言葉につまずいて、成績が下落しはじめる青年の感性に興味をもつ。言葉の書き手たる私とよく似ている、と思うのである。

（中上健次『紀州 木の国・根の国物語』傍点引用者）

書き手によれば、青年の抱える生活上の困難は「社会に対する^{ミスマッチ}不適合」ではなく、「言葉＝社会的規約^{コンベンション}」への不適合である。彼の不幸な境遇は「言葉の意味を正確に考えよう」とすることに起因するものであり、言葉に固執し過ぎるあまりに規範につまずく青年の様子は「言葉の書き手たる私とよく似ている」。後年の講演で主題化されることになる日本語からの疎外とは実は作家の部落問題に対する関心の出発点から潜在しており、作を追うに連れて「彼」と三人称で語られていたその問題が次第に書き手の「私」自身のもものとして引き受けられてゆくのである。

書くこととは日本語につまずくことである、と中上は言う。「中本の悲運に無自覚な所作を繰り返しながら、他の者とくらべると圧倒的に短い生の時間のうちで、右にぶつかって一つ知り、左にぶつかって一つ知るといふ具合に接近していかざるをえないのを知っていた」（『千年の愉楽』）、「タツヤの率る皇統会という党は、てんのうを天に頂いた正しい社会をめざし、綱領の細部が欠けている分だけ、一つ動いてはつまずき、一つ動いてはぶつかりしながら経験を積み、一人前になってゆく」（『異族』）。蓮實は「右にぶつかって一つ知り、左にぶつかって一つ知る」という言葉ほど、小説を書こうとする者の苛酷な歩みにふさわしい修辭学的な表現もまたあるまいと、上記の一文を小説家の書くという営みに重ねている⁴⁶。だがより正確に言えば、そうした様々な作品に描かれる部落青年の境遇を書き手自身の問題として引き受けようとするからこそ、そのエ

クリチュールはつまずかざるを得ないのだ。日本語という母語で書きながらもそこに自身を同定しないこと、日本語を用いながらもそれにつまずき続けること。このような跛行を強いられる試みが中上健次の執筆活動であった。それは彼の前に来るべき作品への期待を「文学としての部落民サイド」と語ったデリダの実践とも、どこか似通いながら展開されていた。

¹ 『文学界』掲載時に付された「はじめに——編集部」には、以下のような注記が添えられている。「昨年12月12日～13日、パリのポンピドー・センターで日本文化についてのシンポジウムが行われた。日本からは、柄谷行人氏、蓮實重彦氏、浅田彰氏が出席、それに中上健次氏が特別参加した。シンポジウムの二日目、フランスの哲学者、ジャック・デリダ氏と中上健次氏の討論が多くの聴衆を前にして行われた。中上氏がまず「熊野」について語り、それをもとにして、デリダ氏との間に興味深い討論が交わされた。ここに掲載するのは、その日の討論の記録だが、聴衆が参加した一部は削除してある。なお、掲載にあたって尽力いただいたポンピドー・センターのジュフロア氏に感謝したい」。

「前衛芸術の日本」展に関しては、コミッショナーを務めた岡部あおみによる『ポンピドゥー・センター物語』（紀伊國屋書店、97・11）がその舞台裏を明かしている。なお、対談中の発言によれば、デリダは八四年に来日した際にも中上と顔を合わせている。記録が残っていないので定かではないが、その会合は、デリダ、浅田、柄谷による鼎談「超消費社会と知識人の役割」（『朝日ジャーナル』84・5・25）に前後する際のものではないかと推定される。

² 浅田彰、柄谷行人、鶴飼哲「Re-membering Jacques Derrida」（『新潮』05・2）。ここで浅田は、注1に挙げたデリダを囲む鼎談について、「『声と現象』の邦訳は七十年に出ていますが、この『朝日ジャーナル』のインタビューが日本の一般読者がデリダに触れた最初のきっかけなのではないでしょうか」と述べている。中上との対談を含め、浅田と柄谷がデリダの紹介を意欲的に行っていたことを窺わせるエピソードである。

³ 守中高明「ファロス・亡霊・天皇制——ジャック・デリダと中上健次」（『現代思想 総特集デリダ』15・2）

⁴ 中上健次「三島由紀夫をめぐって」（85・11・13、於・パリ高等師範学校→『現代小説の方法』、高澤秀次編、07・2）

⁵ 例えば、三島由紀夫「ジャン・ジュネ論」（『群像』53・8）など。ジュネの『泥棒日記』邦訳刊行時に三島は帯文を寄せており、「『泥棒日記』の受容を促進するにあたっての最大の功労者は、しかしながら石川淳ではなく、三島由紀夫である」とされている（岑村傑「ジャン・ジュネの受容史のために——朝吹三吉訳『泥棒日記』と三人の守護聖人 石川淳、三島、安吾」（『藝文研究』11・12）。

⁶ 浅田彰、渡邊守章「舞台の上の政治学 一九八六年十一月二十四日京都大学」（『GS 特集ジュネ・スペシャル』浅田彰責任編集、5 1/2号、87・6）。浅田が執筆している同号の「編集後記」でも、「最後に、再びパリに戻ろう——あの学生デモの熱気もさめやらぬ一九八六年十二月のパリに。そのとき私はポンピドー・センターのホールにいた。柄谷行人・蓮實重彦氏の両氏とシンポジウムを行ったあと、それに続く中上健次とジャック・デリダの対談を聞いていたのだ」とジュネをめぐって議論を交わしたことが回顧されている。

⁷ 柄谷行人「追悼・中上健次」（『文学界』92・10）。一方、中上もまた柄谷との交友をエッセイ「わが友 柄谷行人」（『日本読書新聞』74・11・18）に記している。なお、この時期に柄谷や中上に『日本読書新聞』で執筆の機会を提供したのが、同誌の編集者を務めていた桂秀実である。桂はのちに蓮實にも誌面を供しているの、本稿で取り上げた中上をめぐると言説空間の影の立役者とも言えよう。

⁸ 柄谷行人『近代文学の終り』（インスクリプト、05・11）

⁹ 拙論「政治と文学」再考——ケーススタディ・井上光晴と大西巨人」（『国文論叢』第59号、特集「政治と文学」再考、22・3）

- 10 東浩紀「柄谷行人について」(『ヒューモアとしての唯物論』解説、講談社学術文庫、99・1)
- 11 柄谷行人「内面への道と外界への道」(『東京新聞』夕刊、71・5・9～10)
- 12 柄谷行人「平常な場所での文学」(『東京新聞』夕刊、73・5・17)
- 13 吉本隆明、中上健次「文学と現在」(『海燕』83・11)。また、吉本は「中上健次私論」(『吉本隆明〈未収録〉講演集9 物語とメタファー』筑摩書房、15・8)でも、『枯木灘』を始めとする中上作品の自然描写を「体験的描写」と捉えている。
- 14 江藤淳「文芸時評」(『毎日新聞』77・2・24)。江藤はここで「『枯木灘』を通読して、私は、日本の自然主義文学は七十年目に遂にその理想を実現したのかもしれないという感想を抱かざるを得なかった」と絶賛している。
- 15 古井由吉『東京物語考』(岩波書店、84・3)、後藤明生『小説いかに読み、いかに書くか』(講談社、83・3)など、「内向の世代」は時代を追うにつれて積極的に日本近代文学の伝統の継承者として振舞ってゆくことになる。
- 16 柄谷行人『日本近代文学の起源』(講談社文芸文庫、88・6)に寄せられた「著者から読者へ ポール・ド・マンのために」には、「私が本書の大半を構想したのは、一九七五年から七六年末にいたるまで、イエール大学で日本文学を教えていたところである」との経緯とともにド・マンの思い出が記されている。
- 17 中上健次「『意味という病』書評」(『週刊読書人』75・3・31)
- 18 中上健次「柄谷行人への手紙」(『韓国文芸』81・秋)
- 19 中上健次「小説の新しさとは何か」(『日本読書新聞』76・2・16)。中上の初期作品に見られる日常的な停滞感とそれに対する苛立ちに早くから注目していたのが、「内向の世代」に属する批評家の秋山駿である。拙論「上京青年の犯罪——中上健次「十九歳の地図」論」(『国文論叢』53号、18・3)を参照。
- 20 柄谷行人「『化粧』解説」(講談社文芸文庫、93・8)は、まさに本作を「私小説」と「物語」の統合として捉えている。詳しくは、拙論「熊野への帰郷——中上健次『化粧』論」(『国語と国文学』20・8)を参照。
- 21 柄谷行人「中上健次への手紙」(『韓国文芸』81・秋)。『小林秀雄をこえて』でもすでに柄谷は、「実は、もっと根本的な転倒が前にあるわけだよね。それは古代に中国の文字・法制度が日本に来た時におこっている」と発言している。後年、柄谷は中上から引き受けたその仕事を『日本精神分析』(文藝春秋、97・11)にて取り組んでゆくことになる。
- 22 蓮實重彦「吉本隆明『論註と喩』——矛盾について」(『国文学解釈と教材の研究』81・3)
- 23 蓮實重彦「物語＝書物＝文学」(『季刊・現代批評』79・4)。蓮實における戦後批評家への対抗意識については、梶尾文武「批評と歴史意識——蓮實重彦における政治と文学」(『ユリイカ 総特集蓮實重彦』17・10)が詳しい。
- 24 蓮實重彦「中上健次『鳥のように獣のように』解説」(角川文庫、78・12)。なお、興味深いのは、柄谷と蓮實、さらには江藤や吉本までも、周辺の批評家が共通して漱石を論じているにもかかわらず、なぜか中上においては終生漱石が主題化されなかったことである。漱石から中上へと連なる文学史的なカノンをめぐる問題に関しては、大杉重男『アンチ漱石 固有名批判』(講談社、04・3)が示唆的な検討を加えている。
- 25 ただし中上が蓮實と出会う以前に、テマティズム批評を摂取していたことに関しては、拙論「少年の想像力——中上健次「一番はじめの出来事」論」(『阪神近代文学研究』18号、17・5)を参照。
- 26 三島が影響を受けたサド解釈は、「サドにとって革命とは、せいぜい自分の文学の検証のための鏡のようなものにすぎなかったにちがいない。社会的な事件にまったく無関心であった彼が、最も見事に革命と一体化した文学を築き上げたのは、一に「自由の塔」のおかげであったろう。[...]書くことによって、自分自身の可能性である絶対的な自由のすべてを祭壇に供したのである」とする澁澤龍彦(『サド侯爵の生涯』桃源社、65・8)によるものである。

例えば、これを受けて三島は以下のように書いている。「澁澤龍彦氏の「サド公爵の生涯」を面白く読んで、私が最も作家的興味をそそられたのは、サド侯爵夫人があれほど貞節を貫き、獄中の良人に終始一貫していながら、なぜサドが、老年に及んではじめて自由の身になると、とたんに別れてしまうのか、という謎であった。この芝居はこの謎から出発し、その謎の論理的解明を試みたものである」

(三島由紀夫「跋 サド侯爵夫人」河出書房新社、65・11、旧字は新字に改めた)。上記の通り、三島は戯曲『サド侯爵夫人』でサドを眺める夫人の位置から澁澤的なサド像を捉え直しながらも、最終的には認識者たる夫人と不在の行為者たるサドとの統合を求めていったとすることができる。

²⁷ 蓮實重彦「路地と魔界——中上健次『熊野集』『千年の愉楽』(『中上健次全集 5』月報、集英社、95・7)

²⁸ 吉本隆明「政治と文学について」(於・三田文学文芸講演会、71・5・8→『敗北の構造——吉本隆明講演集』弓立社、72・12)

²⁹ 江藤淳、蓮實重彦『オールド・ファッション』(中央公論社、85・10)

³⁰ 柄谷行人、小林登「自己免疫あるいは不均衡な世界」(『現代思想』84・12)

³¹ 柄谷行人「ド・マン、デリダと語り合った日々——私の謎 柄谷行人回想録 11」(『じんぶん堂』ウェブサイト、24・1・15)。ここでは、ド・マンの叔父のアンリ・ド・マンについても、「アンリ・ド・マンの本は、スターリン主義時代にプロレタリア文化運動を厳しく批判しているもので、日本の思想家、例えば吉本隆明なんかに視点が似ていると思った」と述べられており、やはり柄谷のイェール体験は戦後文学史の蓄積を国際的な文脈から捉え直すものであったと言える。

³² 藤本一勇、立花史、郷原佳以「デリダが〈散種〉したもの」(『週刊読書人』13・4・15)

³³ 図1は、注3に挙げた守中の論による。

³⁴ 守中の議論の問題は、「ネイションと内的「差異」——天皇制イデオロギーのもとでの在日朝鮮人」(『終わりなきパッション——デリダ、ブランショ、ドゥルーズ』未来社、12・3)という別の論考では在日朝鮮人が部落民と同じ位置に構造化されている点に表れている。デリダがまさに「疎外された人間の貴族主義」と呼ぶように、そこでは天皇制批判の下に二つのマイノリティが背景を違えたまま同一の水準へと置かれ、構造的な要請に組み込まれてしまっている。

³⁵ 山口昌男「グノーシスの精霊」(『中上健次全集 9』月報、集英社、96・2)。山口とともに『へるめす』(岩波書店、84・12~97・7) 同人であった中村雄二郎も、『日輪の翼』を「路地」の遊行者たちが定住者の日常的な規範を揺り動かす作品として論じている(「場所・通底・遊行——トポス論の展開のために」『へるめす』創刊号、84・12)。この時期、影響力が大きかった『へるめす』と『批評空間』二誌の間の立場の違いを窺わせる。

³⁶ 遺作に至るまで中上に「円環」の主題が取り憑いており、そのため後期と言われる作品が膨大に膨れ上がらざるを得なかったことに関しては、拙論「大東亜共栄圏とサブカルチャーへの欲望——中上健次後期作品・『異族』『南回帰船』をめぐって」(『マンガ／漫画／MANGA——人文学の視点から』神戸大学出版会、20・3)を合わせて参照。

³⁷ 浅田彰「移動と変身 新たな旅立ちのために」(『中上健次全集 7』月報、集英社、95・12)

³⁸ 柄谷行人、中上健次「路地の消失と流亡」(『国文学』91・12)。「批評的確認——昭和をこえて」(『すばる』89・6)と題した別の対談によれば、二人の間で交際が再開されたのは、八九年二月の駒場寮での柄谷を囲む自主ゼミに中上が訪れたことによる。その際、中上を招いたのは一九歳の学生であった王寺賢太である(王寺賢太「中上健次、一九八九年」『中上健次発言集成 6』付録、柄谷行人、桂秀実編、第三文明社、99・9)。

³⁹ 中上健次「私は〈日本〉人なのか」(於・フランクフルト市議会ホール、90・9・30→『中上健次発言集成 6』柄谷行人、桂秀実編、第三文明社、99・9)

⁴⁰ 大江健三郎、パトリック・シャモワゾー「文学の力——クレオール的未来のために」(『群像』13・2)。ここで大江は、「シャモワゾーという作家が書いた小説で、あなたのオリュノオバを思わせる人物の語りで、小説の鑑と言えらうくらいうまくいっているものがある」と九〇年代初頭の中上にクレオ

ール文学の示唆を与えたことを明かしている。

⁴¹ 中上健次「小説家の想像力」(於・国際日本文化研究センター、91・12・26→『中上健次発言集成 6』前掲)

⁴² 注 2 に同じ。なお、ここでは『トランスクリティーク——カントとマルクス』(批評空間、01・9)から提唱され始めた柄谷独自の概念「トランスクリティーク」が、「ディコンストラクションの否定ではなく、その徹底化である」と説明されている。

⁴³ 柄谷行人「『湾岸』戦時下の文学者」(『文学界』91・4)

⁴⁴ 例えば、蓮實重彦へのインタビュー集『「知」的放蕩論序説』(河出書房新社、02・10)では、ジャン＝ピエール・リシャールらのテマティスム批評の蓄積をデリダが切断したことが「リシャール殺人事件」と名付けられている。その他、後年の蓮實によるデリダ批判には、『表象の奈落 フィクションと思考の動体視力』(青土社、06・12)や『「赤」の誘惑——フィクション論序説』(新潮社、07・3)に収められた所論がある。蓮實によるデリダとの微妙な距離感に関しては、郷原佳以「理論のフィクション性、あるいは、「デリダ派」蓮實重彦」(『ユリイカ 総特集蓮實重彦』17・10)が詳しい。

⁴⁵ 温又柔「デリダの文章と出会って 日本語の住人として」(『毎日新聞』23・8・6)

⁴⁶ 注 27 に同じ。

*中上健次作品からの引用は、『中上健次全集』(全 15 巻、集英社、95・5~96・8)による。本稿は、小川歩人・若林和哉・森脇透青と開催したシンポジウム「いま、国家の脱構築?——デリダ、レヴィナス、中上健次と「国民国家」」(於・京都大学、23・3・26)における口頭発表をもとにしている。コメテーターをお引き受けいただいた、鶴飼哲・大杉重男・早尾貴紀氏や会場でご教示いただいた方々に感謝したい。執筆に際しては、科研費研究活動スタート支援「中上健次作品におけるアジア志向の再検討」(課題番号 22K20024)の助成を受けた。